

症例から考える 第6回

〈陰極まりて陽となす〉

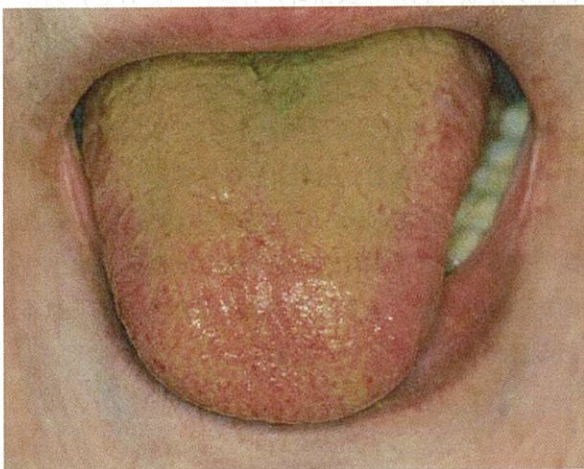
三谷 和男

三谷ファミリークリニック・京都府立医科大学

症例 11 判断に迷う舌象

この1枚のスライド（写真）をじっくりご覧いただきたい。以前『伝統医学』通巻44号（2009）で紹介させていただいたウイルス感染症（下痢・嘔吐）の△○さんである。さて、初診でこの方を診察したときにどう考えるか、という観点でみていこう。基本的に、私は急性疾患の場合、『傷寒論』の原則（三陰三陽）で考えていく。つまり、太陽病なのか、少陽との併病なのか、あるいはいきなりの少陰病からの発症なのか（直中の少陰）……△○さんの場合、舌質の色調が瞬時には判定できないほどの厚い苔が表面を覆っている。

写真



「この舌は内熱の存在が強く疑われます。典型的な陽明病の所見でしょうか？」

「いや、しかし、下痢をされているわけだし、陽明病というのは理解しがたいですが……」

「体の中に残っている毒を外に出すという発想が活かせるのではないのでしょうか？」

「この段階でさらに下せば、痢不止となってしまうと思います……」

「厥陰病にしては、脈はしっかりしてますよ」

とまあ、いろいろと意見が出ました。しかし師匠（父・三谷和合）は簡単に診察をした後、

「厥陰病位やないか、補液して、四逆湯を早、用意せえ！」
「あ、う、どう診られたのですか？ 陽明の所見にもみえますが……」

「陽証のハズないで。もっと自分でよく考え！」

「でも、ぐったりされてませんし……。脈もしっかり打ってはるし」

「何を診てるねん。この熱はどこからきてると思とるんや」

患者さんの全体像からみれば、けっして難しいことはないのだろうが、所見を積み重ねて結論を出そうとすると案外迷う。確かに、一見生命のエネルギーは尽きていないようだが、陽明病にみられる内熱との違いは「寒熱錯雜」の様相を呈していることであろう。経過の長い疾患で、ときに煩躁症状を呈する方にこういった症候がみられることもあるが、あくまで急性期の症候に対して考えるべき病状であろう。まず、医師

の間で見解が分かれるところがポイントである。A先生には「熱」、B先生には「寒」と映っているわけである。カンファレンスをしていると、よく勉強している先生方の中で意見が分かれることそのものが、錯雑と考えられる。カンカンガクガクの意見が出て、まとまらないようでも、この全体像が患者さんの「いま」を示しているわけである。

厥陰病とはなにか

浅田宗伯は、『傷寒論識』において「厥陰とは三陰の終わるところ、治法の極まることなり。ここをもって四肢厥冷、下利、嘔、噦などの証、すべて陰寒おのずから変来するものは皆この篇に属す」と述べている。大塚敬節先生は、『傷寒論解説』で、「厥する者」についての条文の解釈の中で「陽の気が上にのぼり、陰の気が下に残って、陰陽の気が離ればなれになって、相交易しないから、手足が厥冷するのである。さて厥陰病では、上熱下寒の状があつて、胸中には灼熱的な痛みがあり、腹が空いているようで食べられない。食すると吐く。もしも之を誤って下すと下痢が止まなくなる」と述べておられる。奥田謙藏先生は『傷寒論講義』で「厥陰において発現する様々な徴候を備えた病である。厥とは、逆行、陰とは寒である。これは精気が将に尽きんとし、裏寒の極、寒邪は逆行して上に迫り、主に上熱下寒、陰陽錯雑の諸徴を現すものである。依つてこれを名づけて厥陰という。(中略)陽明病を下すことの過度なるに因ても、ここに陥るものがある」と述べられ、先人の観察眼の鋭さを改めて実感する。

△○さんは、もういてもたってもいられなくなって大阪府の郊外、N市から当時私が勤めていた加賀屋病院（大阪市住吉区）まで救急車で来られた。救急隊員は心筋梗塞も疑っておられたようで、到着した病院があまりにも小さく、「こんなところで大丈夫なんですか？」と語っておられた。車内でも、△○さんは繰り返し病院名を指示されていたようである。

もうおわかりかと思うが、『傷寒論』の条文を思い出していただきたい。

「厥陰之病たる、消渴、氣上りて心を撞き、心中疼熱、飢え而して食を欲せず、食すれば則ち蛔を吐し、之を下せば利止まず」

この中の「氣上りて心を撞き、心中疼熱」については、さまざまな考え方があつたと思うが、心はHERZによらない胸の症状（消化管由来のことが多い）であるし、疼熱は、いてもたってもいられぬ煩悶のはなはだしい状態を意味する。常識的には考えられない行動をとっておられるところも診断の一助となる。

忘れられない思い出

△○さんの娘さんが昭和40年代に加賀屋病院の薬剤師として勤務されていたので、△○さんも私のことを幼い頃より知っておられた。私が何回も「救急車をタクシー代わりにしてはいけませんよ！」と口を酸っぱくして言っても、どこ吹く風。N市の救急隊員からも目をつけられていた。入院は私のいるとき、退院は説教されるのがいやなのか、私のいないとき、と決まっていた。父のことは神様のように思っていたが、私はいつまでも小僧っ子……。いつも、「あんたで大丈夫かいな。まあ、しゃーないから診てもらおか」とまあこんな具合であった。「ベーツ」と舌を出した後も、「ほんまにわかってるんか?」。娘さんが恐縮して青くなっていたことが昨日のことのようである。「なんか、こう、あんたにうまいこと言えんけどなあ、わたし熱かったり寒かったりすんねん。ボーツとしてるねん。和合先生やったらすぐわかってくれるねんけどな。あんた、何かチンプンカンプンな顔してるなあ」の言葉とともに、この舌の写真1枚でいろいろな思い出がよみがえる。

厥陰病は、陰寒の極みで、表現型は熱証である。少陽の往来寒熱とは本質的に違う概念である。△○さんのあの一言一言、まさに厥陰病を理解させてくれる、ある意味「師匠」ともいえる。